

10

2022. October

MACHINAMI

まちのみ

特集

変わりゆく新今宮



一般社団法人

大阪府建築士事務所協会





星野リゾートホテルとみやぐりん
白い壁面が際立つOMO7と緑豊かな庭園



ホテルOMO7にある“ご近所マップ”
スタッフがつけてきたお店を紹介



地下鉄「動物園前駅」の大型商業施設
お土産を購入する訪日外国人もよく目にする



恵美須東3南交差点から南西方向
観光客はJR「新今宮駅」から人気スポットへ向かう



西成ドリームガード下
JRガード下の有名な立飲み屋でお料理も安い



太子交差点北西角から東南方向
かつての労働者向けの簡宿街は国際集客の拠点に

訪ねてみました：新今宮



あいりん総合センター（建替予定）
現在地に新しい建物を完成させる予定



萩之茶屋南公園（三角公園）
炊出しや祭りなどさまざまな活動の拠点である



あいりんシェルター
夜間緊急避難所として大阪市からの委託事業で運営



簡易宿泊所を旅行者ホテルに改装
低価格で宿泊できて外国人観光客に人気



南海電鉄「新今宮駅」構内
木目のあたたかいデザインへとリニューアル



簡易宿所転用アパート
部屋は3.5帖。各窓にあるエアコン室外機が圧巻

特集 変わりゆく新今宮



みやりんぐ（星野リゾートのホテルOMO7）から新今宮駅界隈、そして背景に「あべのハルカス」を望む

JR大阪環状線と南海線が交差する新今宮が、大きく変わりつつあります。通天閣などの観光スポットに擁する駅北側（大阪市浪速区）に続き、日本最大の簡易宿所街である南側（同西成区）にも2010年代初めくらいからインバウンドが押し寄せ、新たなにぎわいが生まれました。浪速区側では2019年9月には、一帯のまちづくりを推進する民間の協議会が始動しています。同駅を起点とする鉄道新線「なにわ筋線」の令和13（2031）年開業、公共施設の更新、建て替え、地域の魅力を発掘する「新今宮ワンダーランド」の取り組みも西成区が中心となり、浪速区、経済戦略局と共同で実施されています。

また、今年4月JR新今宮駅北側に星野リゾートが手がける観光ホテル「OMO7（おもせぶん）大阪」もオープンしました。戦後この周辺は労働者の街として知られ、戦後復興期、1970年大阪万博、そしてバブル期に簡易宿所街は繁栄に浴してきました。2025年に開催される大阪・関西万博を背景に、観光地や関西空港からのアクセスの良さなどから簡易宿所の改装やアパート転換、ホテルなどの新築が進み、以前の“まちなみ”からイメージが変わりつつあります。

本特集では、変わりゆく新今宮を取り上げます。長年、西成のまちづくりに参画されている水内俊雄先生に解説をお願いしました。

新今宮ワンダーランド ～地域ブランドのフュージョンと創生～

大阪公立大学文学研究科 客員教授/公益財団法人西成労働福祉センター 水内俊雄

新今宮界隈におけるまちの原型および眺め ～江戸期にタイムスリップして～

2013年に西成特区構想が始まり、筆者は関連する会議の有識者委員を務めてきた。来年度は第3期となるが、第2期後半の一つのテーマは、浪速区と西成区に跨る新今宮駅の南北を統合して発信できる地域ブランドの生成にあった。どちらもナショナル級でそれぞれ著名なエリア名や施設名などをもっているだけ、それをフュージョンしてまとまり得る地域名は、新今宮しかないという認識を有していた。それを地域ブランドとして売り出すプログラムを西成区は公募プロポーザルで求め、その回答が「新今宮ワンダーランド」、そしてそれを統括する絵柄が、曼荼羅^{まんたら}となった(<https://shin-imamiya-osaka.com/>)。詳しくはWebを見ていただきたいが、本特集では江戸時代の地名までさかのぼり、新今宮の歴史地理の近代を紐解き、あわせて現代の開発状況に至る系譜を概観することにした。確かに他地域とは比べ物にならないほど、ワンダーに満ち溢れているエリアであることを知っていただきたい。

江戸時代の日本には七万を超える村々があった。これを江戸藩政村と呼ぶが町場の通りの町名と並んで日本の最も基礎となる地名の単位であり、図1-1の「え」に当たる。タイトルを飾る新今宮の新を取った今宮がそうなんだろうか？ ほぼそうなのだが、駅名に引き

戻して正確にいうと隣の今宮駅の今宮は、1899年の開設時には明治行政村の今宮に由来した(図2-2参照)。藩政村では木津村であった。江戸藩政村と明治行政村の違いは、図1-1の通りである。村役場が機能することと小学校の運営基盤の確立のために、平均千人満たない藩政村の人口規模を二～三千人規模に引き上げる明治の大合併であった。村数も二万台となる。単独で移行する大きな村もあったが、多くは数村で合併した。新村名を創り出すのにさまざまな苦労があったが、今宮、木津は今宮に、天王寺、安倍野は天王寺にと一方に名前が吸収された。近辺では数村合わせたところで生野村、鶴橋村や長居村などが新村名創出例である。難波村は一村で成立している。ちなみに梅田は墓場名で梅田村は存在せず、大阪駅は曾根崎村、阪急梅田は北野村であり、いずれも一村で江戸藩政村から明治行政村になっている。ここで本格的に成立する小学校名は、この明治行政村に由来することがほとんどとなる。

この説明で、新今宮の歴史地理的背景が、江戸藩政村にさかのぼることが理解していただけたとともに、主要舞台は今宮村にあり、と予感していただけよう。もう少し立ち入っておくと、藩政村天王寺との境界は今のジャンジャン横丁から飛田本通商店街の街路になるので、天王寺村にも登場いただくことになる(図2-2参照)。この今宮・天王寺村でしばし江戸後期にタイムスリップしてみよう。二つの秀逸な当時の景観

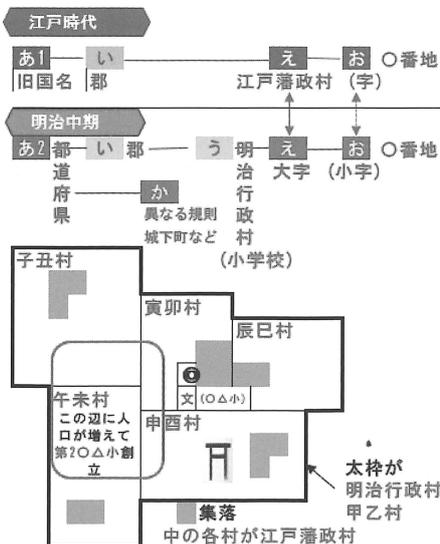


図1-1 江戸藩政村と明治行政村の関係模式図

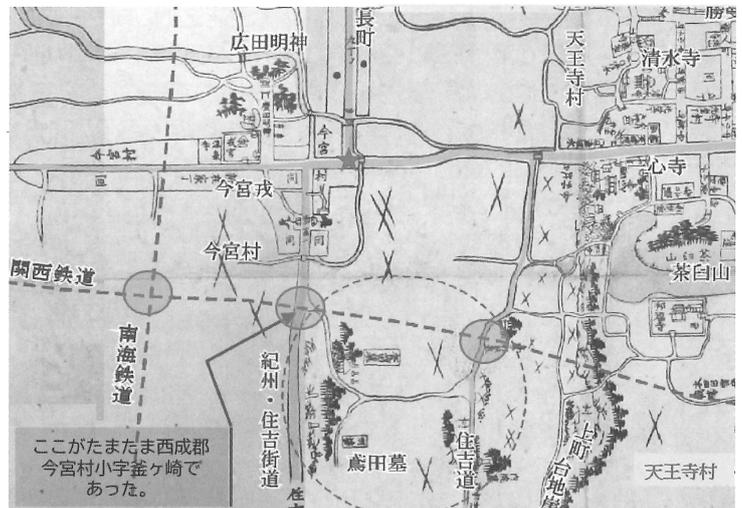


図1-2 『増脩改正攝州大阪地圖』(1804年刊) <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2541883> 点線の鉄道や、線円は現在の太子1丁目、山王1丁目、位置関係がわかりやすいように捕筆している。★は現在の恵美須町交差点である。実線○は、後の鉄道との立体交差点を指す



水内俊雄 (みすうち としお)

和歌山県生まれ。1980年に京都大学理学部地球物理専攻を卒業。1982年に文学部地理学専攻を卒業。京都大学大学院文学研究科後期博士課程中退。1985年に九州大学文学部、1988年に富山大学文学部へ移り、1995年に大阪市立大学助教授、2003年に教授。2000年「近代日本における国土開発・都市開発の地理学的研究」で、大阪市立大学より博士(文学)の学位を取得。大阪市西成区には1996年から関わり始め、2008年設立のNPO法人ホームレス支援全国ネットワークの理事を務める。西成区の関係では、2012年から開催されている釜ヶ崎芸術大学で講師をはじめ、萩の茶屋周辺まちづくり合同会社発行の「萩まちだより」で、地域の歴史地理に関する連載記事を担当、西成情報アーカイブ事業にも参画、現在西成労働福祉センターに勤める。

住吉名勝図会でタイムトリップを

- 1:合邦辻 逢坂
- 2:長町_日本橋筋
- 3:長町の堀(城下町末端)_恵美須町交差点
- 4:礼場、紀州街道への曲がり角_普通の交差点
- 5:住吉街道の光景_恵美須町駅西側
- 戒道:今宮戎、広田神社

- 21:勝鬘院_同じ
- 22:清水寺_同じ
- 23:安井神社_同じ
- 24:一心寺_同じ
- 25:四天王寺_同じ

- 26:茶臼山南の林地と田畑が広がる_天王寺公園近辺
- 27:丸山_阿部野

- 墓地の南
- 28:聖天山
- 14:長閑な天王寺村の田畑_飛田
- 16:長閑な田畑_天下茶屋東、松田町電停



図1-3 『住吉名勝図会』(1795年刊)

https://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/ru04/ru04_04795/index.html

を愛でる城下町絵図と名勝図会がある。前者の絵図に関しては図1-2のように、城下町に接した藩政村なので在方(農村部)も町場と並んで克明に描かれている。近世城下町に欠かせないヒトモノの流れを支える南北と東西に街道が走っていることがまず特筆される。街道沿いに藩政村今宮の集落や廣田神社、えべっさん。上町台地上では四天王寺、一心寺などの数々のナショナル級の寺社仏閣の建物が目を楽しませてくれる。また封建的制度を維持する機能としての街道に付随する木賃宿、墓場、刑場などが立地し、梅田や千日と並んで有名であった鳶田という墓場地名が書き込まれている。自然景観として目立つ上町台地の崖もよくわかる。その他はそれこそなにな野菜の主産地の田畑が広がっている。実に「多弁」なエリアとして描かれている。さらに幸運なことにこれまたナショナル級の住吉大社の存在により住吉街道沿いの名勝図会の景観描写も図1-3のように、今宮村の集落も克明に描かれ、一里塚や大名行列らしき様子や鳶田方面の田畑や墓場、上町台地の森や寺社を望む景観描写を楽しめる。かつての新今宮エリアの原景観をお楽しみいただけたであろうか？

都市発展モデルからみた大阪ループ・サウスにある新今宮周辺の地力

世界の都市発展モデルで最も適用力の高いのが、同心円モデルである。図2-1のように、都市は中心から同心円的に成長、年輪を刻んで行く。中心が都心部 Urban Core、概して江戸時代に形成された歴史的都市(城下町)、そのまわりに江戸期から明治期にかけて、都市縁辺 Urban Margin、次に明治末期から昭和初期

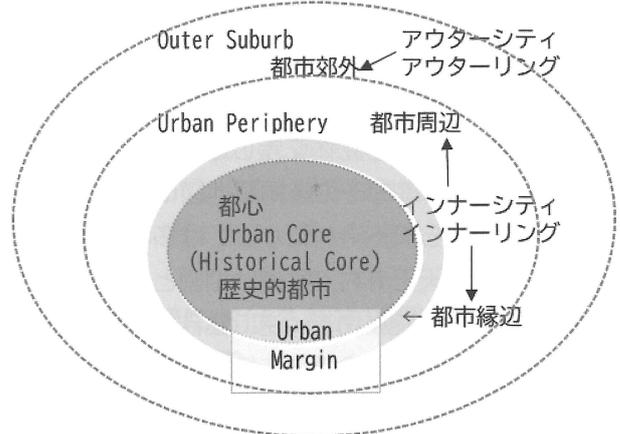


図2-1 都市発展の同心円モデル(筆者作成)

に成長する都市周辺 Urban Periphery、さらに外側に都市郊外 Urban Suburbが、大正末期から戦時下にかけて形成された。MarginとPeripheryを合わせてインナーシティ、インナーリングと呼び、Suburbはアウターシティ、アウターリングと呼ぶ。

戦後はおいておくとして、読者の皆様には、前頁で紹介した今宮は、「都市縁辺」に当たると思われたであろうか。まさしくその通りで、ここに城下町の周縁的なものが集約され、経済、社会、文化的なエッジがあり、明治期以降は開発の最前線にもなる。それを最初に牽引したのが、鉄道であり駅であった。同心円なので、山手線や環状線のようなループ鉄道ができ。そこでの駅が交通の結节点となり、近代都市のホットスポットとなる。大阪ループ・サウスにあたる新今宮駅は例外的にその役割を果たすには大きく出遅れたが、今宮村は、明治中期より遺憾なく「都市縁辺」の立地を生かした一連のワンダー満載の発展を披露する。



図2-2 2万分の1地形図 大阪近傍図 (1898年修正測図)
https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/map_detail.php?id=002151173

図2-2を参照して欲しい。その第一弾は、1885年難波村難波駅から南海鉄道が今宮村を南北に走り、さらに1892年に関西鉄道が東西に敷設され、今宮村大字今宮字水渡で南海と立体交差したことであった。各立体交差は図2-3等のその後掲載地図にも○で示している。今宮村から天王寺村にかけては多くの主要街道が走っていた。天王寺村で鉄道は堀割となりその上を阿部野橋で熊野街道が跨ぎ、逆に住吉街道(紀州街道)は、鉄道が上になりその築堤を煉瓦積み壁面のガードで潜ることになった。その交差地の地名が西成郡今宮村大字今宮字釜ヶ崎であった。釜ヶ崎地名の運命的な注目はこれを起源とする。南に隣接する字東道にある鳶田刑場や墓場は幕府の消滅と運命を共にし、田畑に

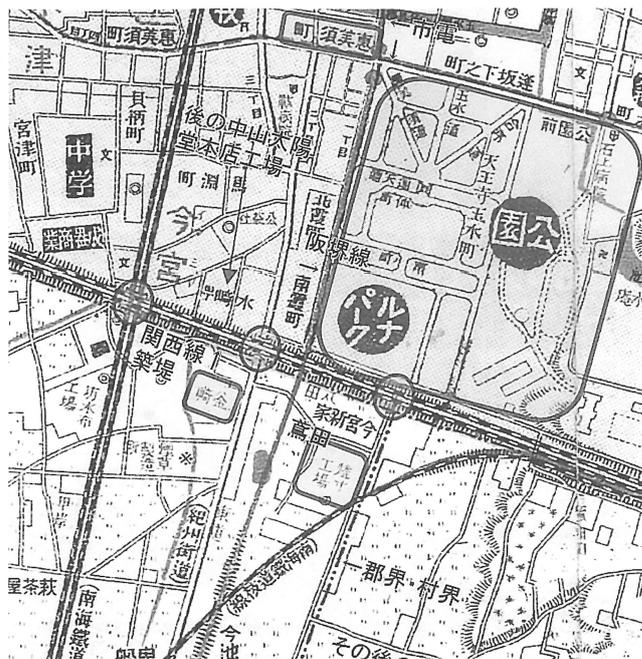


図2-3 大阪市街全圖：實地踏測 (1912年刊)
https://lapis.nichibun.ac.jp/chizu/map_detail.php?id=002468502

帰した。紀州街道の走る長閑なこの地に、関西鉄道の高さ数メートル、長さ1キロメートル強の突然の壁の出現は、できたばかりの明治行政村の今宮、天王寺両村を南北に分断し、こともあろうに1897年には壁＝鉄道以北が大阪市に編入された。これまた運命的なこととなるが、壁が人工的に第一次合併の市の新たな南の境界となった。中心集落を大阪市域の新生の南区に取られ、以南の残りの地にほとんど人口のない新たに西成郡今宮村、東成郡天王寺村としてリスタートする。これ以降、南北に分かれた両地は「都市縁辺」の地の利を生かしてまったく異なるかつ他に見られないユニークな発展をそれぞれ見せることになる。



図2-4 昭和2年頃撮影の新世界上空からの写真に水内加筆 (西成情報アーカイブ 管理 上田貞治郎写真コレクションより)



図2-5 大正末期撮影の天王寺公園上空からの写真に水内加筆 (西成情報アーカイブ 管理 上田貞治郎写真コレクションより)

北側は市域の南限、鉄道以北、天王寺までをミナミの遊興機能の受け入れ、あるいは新規開発の地として大いに注目された。代表的には1892年の難波駅東南にできた「有宝地」であり目玉の高塔通称「眺望閣」、1896年には恵美須町交差点南東に「偕楽園」でこれまた高樓の今宮商業倶楽部、そして1903年には万博に匹敵する第五回内国勧業博覧会で大林高塔が聳え、最終的には1911年に西洋式公園たる天王寺公園や動物園とセットで初代通天閣を擁する新世界が登場する。図2-4、図2-5は1927年頃の新世界と天王寺公園の貴重な鳥瞰写真である。市電の幹線筋に直結、1918年に開業の南方の天王寺村大字天王寺字堺田にできた飛田新地ともジャンジャン横丁で結ばれた。1938年には地下鉄動物園前駅も登場、壮麗な市立美術館も含め、一大アミューズメントの地、テーマパーク的存在、アーバンツーリズムの聖地として大きな集客の磁力、地力を持つことになった。ジャンジャン横丁より東側が元々の東成郡天王寺村、その西側が西成郡今宮村にまたがるこのエリアは、新世界を代表とする派手な地力に加え、地味ではあるが他の地に例を見ないようなナショナル級なあと三つの磁力、地力を発することになる。

図2-3に描かれた地名や工場名を参照してほしい。二つ目の地力は「都市周辺」インナーリングの内陸部の工業化で明治中期のそれを牽引した燐寸工業(鳶田墓場あと)の進出の場として選ばれたことにある。その労働や生活状況が国内初の農商務省のルポルタージュ「職工事情」で描かれたことは特筆される。図2-6のように、紀州街道の鉄道より北の、化粧品製造の中山太陽堂やプラトン社の両工場も注目される。秀逸な広告宣伝により、通天閣の大天井画でも今も飾られているが、今でいう文化創造企業が産み出されたこと。

三つ目の地力は1898年に木賃宿の指定地が市中で禁止され府下のみ許可となったことに端を発する紀州街道沿いで鉄道交差より南側が一つの指定地となり、1904年くらいから一気に木賃宿化したことにある。多くの力役の自由労働者が集住することになり、日本で最大級の木賃宿街の地力を発揮することになる。四つ目に脆弱な生活状況にあるこのような自由労働者のセーフティネットとして日本最古の社会福祉法人、大阪自彊館が、1911年に共同宿泊所を始めたことに端を発し、最大規模の不良住宅改良も含めていわゆる社会事業のメッカになったことである。

このように、四つのナショナル級の地力を持ちつつ、戦前期は省線以南は今宮とか釜ヶ崎と呼ばれた(図2-3参照)。肝心の南海との交差地に駅はできず、鉄道が集中しながら駅のない街であり、市電や阪堺電車以外では、1938年の動物園前駅が最初となる。1938年には土盛りの省線の上を跨ぎ、難波からの南海鉄道は複々線高架と言う巨大で高い壁を西側に堂々と築いた。阪堺本線・平野線も南海天王寺支線を跨ぎ土盛りの築堤であったため、今宮、釜ヶ崎はさながら鉄道という壁に囲まれた城塞都市の体をなすことになる。この事がかえって地域の独自性を高めることになった。色々な意味でワンダーな場所がこの時期確立された。

新今宮界隈における都市開発のユニークな系譜

戦時中に通天閣は部分的に焼失し、その後鉄材供出



図2-6 当時の南区水崎町に本店工場を構えた中山太陽堂の昭和初期作成のパノラマ図(現在の星野リゾート ホテルOMO7の敷地)(クラブコスメ文化資料室提供)



図3-1 1945年6月4日撮影の米軍偵察写真
戦後の名称で表記（筆者所蔵）

で解体。1945年3月14日の最初の大阪大空襲で標的となった今の環状線内側は壊滅的被害を受け、図3-1のように、鉄道以北はほぼ焼失、以南では三分の二は焼失と言う大被害を被る。少々小話であるが、住める多くの家がなくなる中で、ミナミ方面の芸人さんたちが戦後直後より利用したのが、焼け残った山王エリアの長屋街であり、活動の拠点が飛田本通り商店街に残っていた芝居小屋「天王寺館」であった（図3-1参照）。難波利三さんの小説『てんのじ村』の舞台、長屋路地の面影はわずかに残るが、現在芸人は住んで

おらず、上方芸能の顕彰碑をみることができる。

戦後の復興はお決まりであったが、土地区画整理と都市計画道路や公園の整備を伴う戦災復興事業であった。当該エリアもほぼ例外なく施行される。図3-2で戦後の開発の特徴をまとめてみたが、他地域にはほとんど見ることのできないユニークな開発の4本の流れ（A、H1、H2、S）として整理できる。図3-2の一番上にはその開発を牽引するあるいは影響を与えた時代イベントを記している。バブル期までは労働者のための都市開発であり、平成不況から福祉ドライブ期には福祉受給者用、インバウンドドライブ期では、ツーリストや外国人をコンテナする都市開発・更新となったことがユニークな点となる。その開発の・更新が生み出す建造環境の4本の流れは、他所では見ることのできない実にワンダーそのものである。

まず浪速区側のH1の開発の流れであるが、復興事業では、都市計画の道路や公園予定地に多くの自然発生的集落が生まれ、特に鉄道より北側ではその立ち退きの独特の処理の過程で、この地にしかない日払いマンションや、立ち退き者用の厚生省管轄の社会住宅である生活館なども1962年に登場する。一方、西成区側の開発の流れH2では、木賃宿街は簡易宿所街を見越して1区画が結構大きく換地され、日本一の簡易宿所街、寄せ場となる基盤を整える。開発という側面からみると、簡易宿所そのものは万博を機に木造からマンモスドヤ、バブルで中層の3畳一間のワンルーム簡易宿所が数多く登場し、低層から中層の簡易宿所街へと1990年代初頭には変貌する。

さらに最もユニークなのは1962年の暴動対策とも時期が符合しつつ、日雇い労働者への独自の保険制度と雇用事業所の管理システムが導入される。Sの社

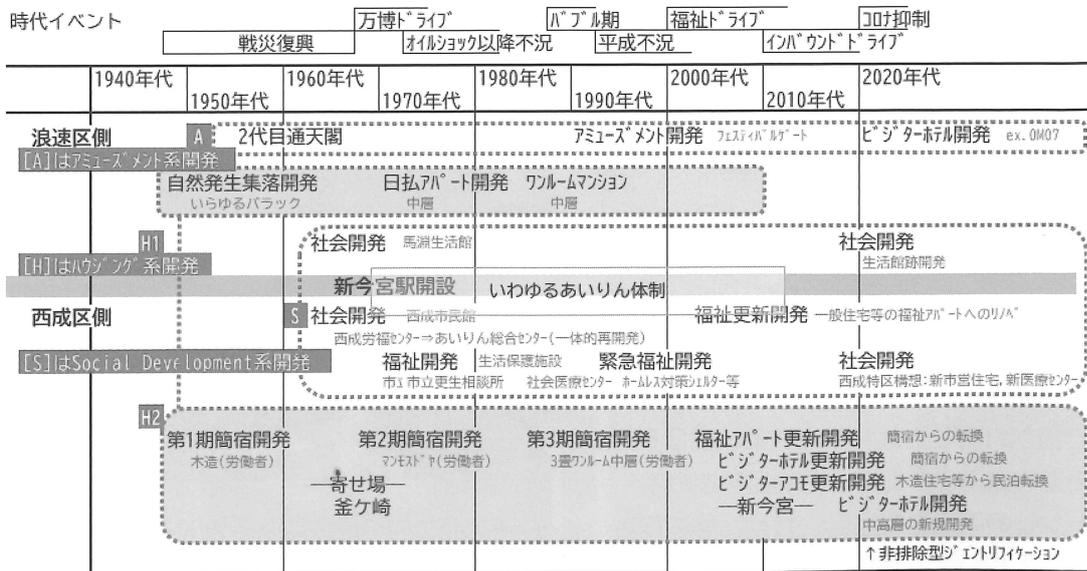


図3-2 新今宮界隈の4つの開発の流れにもとづく整理年表（筆者作成）



図3-3 あいりん総合センターの完成当時の空中写真（1971年3月）
まだ第2住宅は建設前である（大阪社会医療センター提供）



図3-6 1989年12月撮影のバブル期に一気に登場した中層簡易宿所の
偉観新今宮駅ホームより
（西成情報アーカイブ 管理 上畑恵宣写真アーカイブより）



図3-4 1966年ごろ撮影の建設途上の南海新今宮駅と国鉄との
連絡こ線橋（西成情報アーカイブ 管理 上畑恵宣写真アーカイブより）



図3-5 1968年ごろ撮影のマンモスドヤが登場し始めたころの写真
（西成情報アーカイブ 管理 上畑恵宣写真アーカイブより）

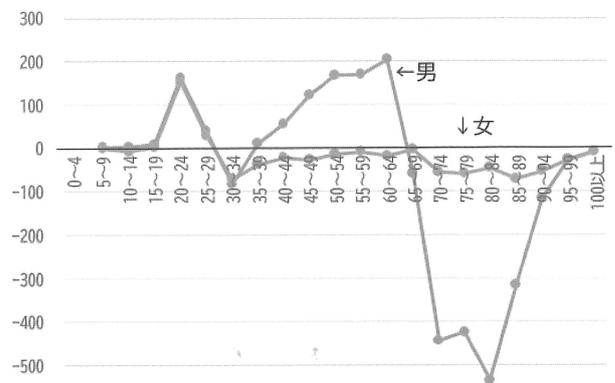


図3-7 2015-2020年国勢調査によるあいりん地域の
コーホート人口変化（不詳人口補完済データを使用）

会開発の流れであり、その核となるあいりん総合センターが、住宅地区改良事業なども併用しながら大々的に建設された。職安、労働福祉センター、社会医療センターに市営住宅(H)という大規模な公共用途コンプレックスの偉観をもって新今宮駅前に1971年に登場する（図3-3）。福祉セクターでは市立更生相談所という本庁直轄の25番目のあいりん地域のみ管轄の福祉事務所もできる。ちょうど駅もようやく1966年に南海、国鉄の乗り換え駅としての新今宮駅が本格稼働する（図3-4）。

H2では万博時にマンモスドヤ（図3-5）、バブル期に3畳一間のビジネスホテルをピークとして労働者用アコモが整備された（図3-6）。2000年代に入って、日雇い労働者の高齢化や雇用方法であいりん地域を通

さないケースも増えたことから、簡易宿所街は、労働者用だけでなく、インバウンドのツーリスト相手へのサービス変更と、福祉アパートへの転換という3極化を見ることになる。2013年からは西成特区構想のもと、センターエリアの建て替えの社会開発が始まった。コロナ禍前には、民泊も激増、また中国人不動産業によりカラオケ居酒屋も商店街に大々的に進出。コロナ禍においても特にベトナム人の集住は加速化し、日本語学校の留学生などを中心に、20歳代の男女若者の流入が多くみられるようになった（図3-7）。

再度図3-2を眺めていただきたいが、流動性の高い利用者が時代とともにその主力を変えてゆき、開発も更新もそれに応じて効率よく対応し、このような七変化にもこたえてゆることができる大変柔軟に機動的に対応してきたエリアとして特筆されよう。この過程において、脆弱層を排除するというより脆弱層とも共存しながら建物が更新、新築されてゆく。このような非排除型のジェントリフィケーションが見られることも、そのユニークな特質として指摘しておきたい。今後の変化にも目が離せず、奥深い多くのワンダーを引き続き享受できることを楽しみにしている。